

絆

校長 荻野 秀和

天下統一を果たした豊臣秀吉の家来に大谷吉継と石田三成がいます。社交的で明るい吉継と冷静沈着な三成、お互いにないものを持っている親友として、二人は大変仲がよかったそうです。

ある日、秀吉が自分の家来数人を呼んでお茶会をしました。吉継も三成も参加していました。そのお茶会では、一口飲んだらお茶碗を次の人に回すという一つの茶碗で回し飲みをするルールでした。この頃吉継は、疱瘡を煩い、顔に膿がたまっただけものがあったようです。今でも、ゲームや漫画で吉継のイラストを見ると顔を隠すように覆面をしています。

やがて吉継にお茶碗が回ってきました。吉継が一口飲んだ時に、顔から膿がポタリとお茶碗の中に落ちました。お茶会の参加者全員が膿の落ちたことを見ていました。吉継はお茶碗を次の人に渡しましたが、次の人は飲んだふりをしました。また次の人も飲んだふりをしました。最後の三成のところへ茶碗が回ってきました。三成は一気にお茶を飲み干しました。三成の行動でお茶会の緊張感が解けました。吉継以外の人は「汚いから飲めない」と言わないことが、自分ができる吉継への最高の思いやりだったのでしょうが、三成は違いました。お茶を飲み干すことで、この窮地を納め、吉継への思いやりを示しました。吉継はこの出来事で、一生三成に仕えることを心に決めたのでした。

やがて秀吉は、まだ幼い息子の秀頼に天下をたくし亡くなりました。亡くなる前に秀吉は家来たちに息子の秀頼を補佐し天下をまとめてほしいことを家来に告げました。三成と吉継はこの秀吉の言葉を忠実に守り、秀頼中心に国をまとめようとしていました。しかし、同じく秀吉の家来だった徳川家康は自分が天下統一することを目指し策略を練っていました。そして、ついに1600年、秀頼を中心とする三成のグループと、家康中心にするグループに分かれて関ヶ原の戦いが起きました。世に言う天下分け目の関ヶ原です。吉継は三成に従い秀頼中心のグループに加わりました。このころ吉継の病状は悪化しており、興を作ってそれに乗って戦に参加していました。戦いは接戦でしたが、家康の勝利に終わりました。三成と吉継は敗れ亡くなりました。吉継の時世は「契りあらば 六つの巻で待てしばし おくれ先立つ事はありとも」(約束がかなうのであれば 六つに分かれているといわれるあの世の入り口でしばらく待っていてくれ 私が遅れるか先に行くことがあっても)でした。

子どもたちも、このような強い絆で結ばれた親友をもてるといいですね。学校の様々な活動を通して、絆をもてる友人ができるよう日々の活動を大切にしていきます。